

2019年曳山祭順路図

4日
18:00~22:30まで
善徳寺前交差点から城端庁舎前交差点が
通行止

5日は右図の通り
8:30~24:00まで
通行止

- ← 午前
- ← 午後
- ← 提灯山
- ← 帰り山
- ← 終日車両通行止
- ← 駐車場
- ★ からくり披露
- ← 車両の進行方向
- ! 見どころポイント

●曳山祭見どきガイド

- 4日(土) (宵祭)** 17:00~22:00頃 6ヶ町の各山宿での飾り山は必見です。
18:00~ 御旅所(じょうはな座)にて獅子舞、お着儀、浦安の舞、城端賛歌、庵唄が奉納披露されます。
18:30~ 曳山会館にて、獅子舞・浦安の舞・城端賛歌・庵唄合同披露等が催されます。(雨天中止)
- 5日(日)** 8:30~ 御旅所から神輿・傘鉾行列が発し、氏子町内を巡行、3時ごろには神明宮へ還御されます。
9:20~ 獅子舞、鉦鉦、傘鉾、神輿、庵屋台、曳山が善徳寺前交差点に一同に並び出発式がおこなわれます。
9:30~12:30 出発式の後、庵屋台や曳山が野下→今町→東上→西下→東下→西上へと庵唄を唄いつつ巡行します。
14:00頃 宗林寺町から大工町へ抜ける際、曳山の屋根を折り上げるのも見ものです。
19:00 提灯山となり広小路を出発。
14:00頃と20:30頃 曳山会館にて各町の庵屋台・曳山紹介と庵唄が披露されます。(特設会場にて)
22:00頃 城端庁舎前での提灯山行列の引き返しは圧巻です。(帰り山)

飾り山宿

- ① 東上町 東上町内会 (野村潔志宅)
- ② 大工町 山本佳和 (自宅)
- ③ 西上町 本井幹衛 (諸木紀子宅)
- ④ 東下町 神田・岩田家 (東町庵)
- ⑤ 出丸町 出丸町内会 (出丸町公民館)
- ⑥ 西下町 堯風会 (西下町公民館)

城端曳山祭

二〇一九年
五月五日
(宵祭四日)

ユネスコ無形文化遺産
国重要無形民俗文化財

薄雲
月影
思ひ
早
若
合



画 小原好博



優雅な庵屋台と華麗な曳山行列、桐の花咲く坂の町に紫の香りが流れる。

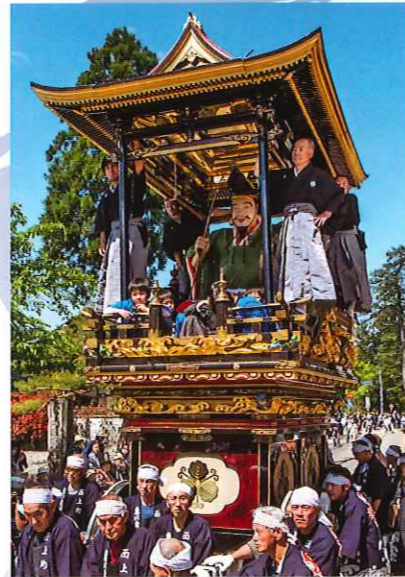
一番山
東上町
鶴舞山
つる まい やま
安永年間、小原治五右衛門の作
(1772~1781年) 輻車
千鳥・唐破風の屋根、平天井



二番山
大工町
千枚分銅山
せん まい ぶん どう やま
明治31年の大火で類焼、同39年
浅野喜平・辰次郎の作。輻車
四方唐破風の屋根、平天井



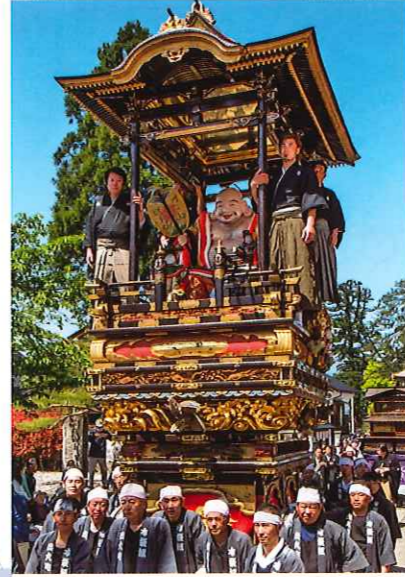
三番山
西上町
竹田山
たけ だ やま
安永年間、小原治五右衛門の作
(1772~1781年) 板車
四方一文字の屋根、平天井



四番山
東下町
東耀山
とう しょう やま
享保年間の作を改修・増補
(1716~1736年) 輻車
前後唐破風の屋根、格天井



五番山
出丸町
唐子山
から こ やま
享保年間の作を改修・増補
(1716~1736年) 板車
前後唐破風の屋根、平天井



六番山
西下町
諫鼓山
かん こ やま
享保年間の作を改修・増補
(1716~1736年) 板車
三方唐破風の屋根、平天井



「曳山」

寿老

《安永2年(1773年)、荒木和助の作》



関羽・周倉

《寛政8年(1796年)、荒木和助の作》



恵比須

《寛政7年(1795年)、荒木和助の作》



大黒天

《安永3年(1774年)、荒木和助の作》



布袋

《宝暦12年(1762年)、荒木和助の作》
《弘化3年(1846年)、小原治五右衛門改作》



堯王

《享保元年(1716年)、木屋仙人の作》



「御神像」



「庵屋台」

「庵唄」 解説：「端唄の流れる里 桂書房」引用

薄墨 松声会

薄墨に書く玉章の 思いして
雁啼き渡る宵間に 月影をうらまへに
焦がれて急な たたみ算
思いまわしてまなぬ 早く苦界を候かしく

〔解説〕幕末の安政五年(一八五八)に出来た次の新曲で、後に江戸端唄の代表曲となる。歌詞は津守園基の和歌の「うす墨に書く玉章に見ゆるかな かすみの奥へ帰る雁金」を土台にして、遊里の女性の悲しみを描写している。「置算」は古い一種で、侍人が来るか来ないかを、算を投げた畳の目を数えて占う。庵唄は特にうたの前身をそのままだで使用している点、注目される。

草の葉に 冠友会
草の葉に 宿りし月も小夜風に
憎やこぼれて げらげらと
露かやか 露か露か
濡れて色増す 野辺の色

〔解説〕慶応元年(一八六五)江戸市村座の狂言「処女評判善悪鏡」の中へ使った清元の「夕立」の一曲の端唄である。作詞者は河竹黙阿弥で作曲は清元順三(二世)と伝えられている。須走りのお熊と、真野屋徳兵衛との濡れ場がこの端唄がはめ込まれて、しつとりとした節付で如何にも江戸端唄らしい味がある。歌詞もさすがに黙阿弥の作だけに簡潔の中へ充分艶をもたせている。

空ほの 恵友会

空ほの 晴き 東雲に
木の岡がくれの ほととぎす
鶯のほつれと 枝さあぐる
柳のやが しくが露か
ぬれてうれしき 今朝の雨

〔解説〕俗に黙阿弥のザンギリ狂言と称された明治を反映した筋書きで、黙阿弥が白浪物一世一代の書き納めとして、場面は東京神楽坂の望月(金貨)の住居で、旅芸者弁天お照との濡れ場の詞章である。

重ね扇 宝檀会

重ね扇は よい辻うらよ
二人しつぱり 抱きかしのわ 菊の花なら いつまでも
添けて ながめている心 色も香もある 梅の花

〔解説〕江戸端唄系文化十四年(一八一七)江戸市村座で上演した「道善黒扇子」に、三代目尾上菊五郎が七段を演じ好評を受けた時に出来た小唄である。元唄は「重ね扇はよい辻うらよ、二人しつぱり抱きかしのわ」でも何のそのであり、重ね扇抱きかしの梅の花の紋を意味している。現行の曲は明治中期に井原素彦が改調して作ったもので、「添けて眺めて」梅の花の二節は五代目菊五郎の愛人辻井梅の名を隠している。

花 袋同志会

憎らしい 憎い仕打らが 虫が好く
意見せらるる 程憎す想い
花を愛して 嵐と憎む 氣随で通す 私でも
苦勞する氣に なるわいな

〔解説〕昭和二十二年、東下町の庵唄として宝檀会で演奏された曲である。以来二十九(出丸町)、三十二年(東下町)、三十六(出丸町)、四十四(出丸町)、四十四(東下町)、四十九(東下町)、五十四(出丸町)、五十八(東下町)、六十四(出丸町)と連続して現在に至っている。これは八代庵唄として新作が定着したことは珍しく、「我様様」の替りとして成功している。ただし作詞者が不明であることが惜しまれるゆえ、目下調査中。

浅くとも 諫鼓共和会

浅くとも 清き流れの かきつばた
飛んで行ききの 濡れつづめ
のぞきに来たか 編み笠の
顔と見とうは ないかいな

〔解説〕この唄は杜若の咲く吉原の賑を唄ったものと言われており、清く澄んだ流れに咲いている燕子花(杜若は燕が来る頃に咲くので、燕子花(かきつばた)とよぶ)を眺めていると低く空を飛び交っている燕が、そこへ誰だとも見分けのつかないほど遠く離れたところではなにかと心躍らせ、あゝ燕さんあの編み笠の下にある顔を覗いてきてちょうだい、ちよつとだけでもあの人のお顔が見てみたいの、と遊女の逢いたい逢いたいと強く願う心がひしひしと伝わる名曲です。